

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



ファイター！イッパツ！

若い頃、徹夜明けの病院の自販機で、何度そう言ってドリンク剤を飲んだことだろうか。

腰に手をあてて一気飲みをすれば、少しだけこの人に近づけるような気がしていました。どんな困難にも立ち向かえる、不死身な男に。人気俳優の渡辺裕之さんが、5月3日に神奈川県内の自宅で死去されました。享年66。自宅地下のトレーニングルームで縊死、との発表です。コロナ禍に、渡辺さんは自律神経失調症と診断され、お薬を服用していたといえます。

訃報とともに聞こえてくるのは、どんな仕事にも手を抜かない、家族思いで心配性、音楽や

254 俳優 渡辺裕之

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

いい家族も親友も、ましてや医者や専門家にはわからない深い深い宇宙の闇のようなもの。

仕事も私生活も充実し、輝いて見える人が、コロナ自粛の中、異世界に没われるようにしてこの世から旅立ってしまうケースを、僕も何人か見てきました。還暦を過ぎて非のうちどころがないように周囲から見えるということは、相当な完璧主義で、日々たゆまぬ努力をされていたはず。ふと、三島由紀夫が、死の哲学をめぐって書いた『葉隠入門』の中の、こんな言葉を思い出しました。

〈もし、われわれが生の尊厳をそれほど重んじるならば、どうして死の尊厳をも重んじないわけにいくだろうか。いかなる死も、それを大死と呼ぶことはできないの

「完璧」を完結させたかったのか

である〉

ゴルフなど多趣味でどれもプロ級の腕、筋トレやジョギング、ウォーキングをかかさず肉体美を保ち、近所のゴミ拾いも率先してやっていた。等々、中身も外見も、「非の打ちどころのない人」に見えました。そんな60代は、僕の周りには見当たりません。コロナ自粛さえなければ、渡辺さんが心を患うこともなかったかもしれません。

人間の心理なんて、どんなに仲の

三島由紀夫も、渡辺さんと同じように筋トレをして肉体美を維持し続けていた「表現者」でした。あらゆる表現は肉体活動であるから、肉体が衰える前に、自分の美を完結させたいと30代の頃から、45歳で死のうと考えていたという逸話は、良いか悪いかを超越し、そのストイックな覚悟に平伏すしかありません。

もしかすると渡辺さんも、完璧な肉体で仕事をこなせる年齢のうち、自分の美学を完結させたかったのではないかと。僅かにそんな想像も過ります。

医者ですから「自殺はダメ絶対！」と書くのが僕の役割でしょう。でもダメな死なんではあるわけがない。渡辺さんは永遠に、憧れの同年代です。

